

ダールの短編における<目>の描写について

著者名(日)	武藤 哲郎
雑誌名	Otsuma review
巻	28
ページ	7-15
発行年	1995-07
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00004249/



ダールの短編における〈目〉の描写について

武藤哲郎

ローアル・ダール (Roald Dahl, 1916-1990) の短編を評して、その特色はダーク・ユーモア、意外な結末そしてかすかな恐怖、その人物描写は深みに欠けるが短編小説の構築にかけては彼は達人であるとよく言われる。マルコム・ブラッドベリーは彼を「モラリストではなく、深くを見ようとする人でもない——しかし本当の職人である」と言っている。¹⁾ダールの短編小説の魅力は何と言っても予期せぬプロットの展開にある。しかし、明快な文章そして大衆性ゆえに人間や人生の切り取り方、つまり文学性に欠けると指摘されている。こういった問題も含めて本稿では「ウィリアムとメアリー (‘William and Mary’)」の〈目〉の描写を中心に、ダールの短編に見られるいくつかの特徴を考えてみたい。

I

ウィリアム・パールが死んだとき、彼の遺言は簡単なもので妻にそれほど多くの遺産は残さなかった。弁護士と一緒に遺言を読み終えたパール夫人が帰ろうと席を立ったとき、弁護士が机の中から一通の封筒を取り出し、「御主人が亡くなられる直前に、これを奥様に渡して欲しいと頼まれました。何か個人的なものらしいので家に帰ってからお読み下さい」と言ってそれを彼女に渡した。封筒を受け取り、外の通りに出た彼女はそれが夫からの最後の別れの手紙で、堅苦しく息の詰まるものに違いないと思った。ウィリアムは打ち解けた行動の取れない男だった。「親愛なるメアリー、私が死んだからといってそんなに取り乱さないで欲しい。結婚生活で君を導いたはずの格言をこれからも守って欲しい。全てにおいて勤勉で品位を持ちなさい。お金を無駄使いしないように。……など、など」というような内容の手紙を、メアリーは通りを歩きながら想像した。あるいはひょっとして死に望んだ彼が、30年間彼のシャツを何百万枚となくアイロンがけし、何百万回となく彼の食事を用意したことを彼女に感謝した優しい愛の手紙なのかも知れないとも

思ってみた。結局、死を間近にしたとき、人はどんな行動を取るかは分からないと自分に言い聞かせて彼女は家に急いだ。

玄関から居間に入り、彼女は帽子とコートをつけたままソファにすわって封筒の中身を取り出した。20ページ近くの白い紙に小さな字が細かくびっしりと書かれてあった。それを見た彼女は目をそむけた。タバコに火をつけ、ふーと煙を吐いてそれを灰皿に置いた。読みたくないと思っただけ。彼女は暖炉の反対側にあるいつもウィリアムがすわっていた椅子を見た。それは大きな茶色の皮の安楽椅子で、長い間にすわるところにくぼみができ、頭をのせるところには黒いしみができていた。いつも彼はそこにすわって本を読み、彼女は反対側のソファでボタンを付けたり靴下をつくろったりしていたのだった。

そして時々二つの目が本から離れ彼女を見上げるのだった。それは用心深く、奇妙に非人間的で、あたかも何かを計算しているかのようだった。彼女はその目が好きにはなれなかった。それは氷のように青く、冷たく、小さかった。彼女の人生においてずっと、それは彼女を見張っていたのだった。²⁾

このような〈目〉の描写は「ウィリアムとメアリー」に限らずダールの短編にはかなり多い。たとえば「宿屋の女主人（‘The Landlady’）」では「その窓には宿泊と朝食と書かれてあった。宿泊と朝食。宿泊と朝食。宿泊と朝食。それらの文字は大きな黒い目のようにガラスごしに彼を見つめ、彼を捉え、彼をその場に釘付けにした」があり、「ローヤル・ゼリー（‘Royal Jelly’）」では「ぼんやりとしたうつろなまなざしで、あたかも目そのものが脳とつながっていなく、二つの小さな灰色の大理石のように目のくぼみの中でゆるんでいた」という表現がある。今まで指摘されてこなかったが、ダールの短編にはこのように〈目〉の描写が多い。

II

メアリーは手紙を読み始めた。「親愛なるメアリー、この手紙は君あてのもので、私の死後すぐ君に渡されることになっている」で始まる手紙は長く、作品全体の8割を占め、語り手はウィリアムに変わっていく。彼は末期的す

い臓癌で、発見が遅れたためもう手術もできず、あと一ヶ月から六ヶ月の命であった。そんなとき病室にランディーが入ってきた。彼は精神外科医で、メアリーとは面識がないが、オックスフォード大学で哲学の教師をしているウィリアムとは心理学を介して数年来の友人であった。ランディーはある提案をしにやってきたのだった。動物実験では成功したので、いよいよ人間に実行してみたいと言う彼の目は「激しく明るく、興奮のきらめきがその中心にあった」。提案というのは、ウィリアムが死んだ後すぐ首の動脈と静脈に管を差し込んで、その管を通して酸素を加えた血液を人工心臓から送り込むことによって彼の脳を生かしておこうというものだった。「問題なのはいかに脳を無傷で君の死んだ体から取り出すかだ。体はもう役に立たない。実際それはもう腐り始めている。頭蓋骨と顔もまた役に立たない。それらは邪魔なものでしかない。私が欲しいのは脳だけなんだ。清潔で、きれいで、生きている完全な脳。だから君を手術台に乗せたらすぐ小さな電動のこぎりて君の頭蓋骨を取り除き始めるんだ」とランディーは話す。さらに彼は、前の週に意識を失った患者の脳から麻酔なしに血の塊を除去する手術を行っているとき、その患者が突然意識を取り戻しランディーに「ここはどこ？」と話しかけてきた話をする。実際ダールは戦時中、あまり効き目のない麻酔によって頭を手術されそうになったことがある。

ランディーはその状態で保存された脳は考えることも、記憶することもできると話す。ウィリアムが「でも見たり、感じたり、嗅いだり、聞いたり、話したりすることができないじゃないか」と非難すると、ランディーは一つ言い忘れたことがあったと言った。それは〈目〉のことだった。彼は一つの目と、それと脳をつなぐ6センチの視神経を無傷で残すつもりだと言った。ランディーは最後に、「その脳は今までと同じように本を読むことができる。哲学者として人生を、はちに入った溶液の中で外界から邪魔されず心静かに考えることができる。もしかしたら偉大な思想、哲理が生まれ、それが我々の人生に革命をもたらすかも知れない」と語る。結局ウィリアムは、知識が一杯詰まり想像力に富んだ自分の脳を残すことに同意する。手紙の最後で、ウィリアムは彼が死んだ7日後にランディーに連絡するようにメアリーに告げる。追伸として、カクテルを飲まないように。お金の無駄使いをしないように。タバコを吸わないようになど、例によって彼女に忠告することを忘れなかった。

手紙を読み終えたメアリーはバッグからまたタバコを取り出して火を付けた。全てがおぞましく、下劣で体に震えがきた。彼女はタバコを深く吸い込み、煙をいきおいよく吐き出した。その煙は部屋中にたどった。彼女はタバコを吸っているのをウィリアムに見つかった一年前のことを思い出した。彼の目の中心には「怒りの小さな黒い点が燃えていた」。それから4週間彼は、自分で生活費を払ってメアリーにはいっさいお金を渡さなかった。夕食のときメアリーは、「どうしたというの。私が肺癌になるのが恐いの」と彼に尋ねてみた。彼は「そうじゃない。タバコの煙が嫌いなんだ。ただそれだけだ」と答えた。彼は子供も嫌いだった。だから彼らの間には子供はいなかった。メアリーはランディーに電話をかけた。彼は脳が二日目に意識を取り戻し、目も見えていると告げた。30分後病院に着いたメアリーをランディーはそれが置かれてある部屋へと案内した。

はちの中をのぞき込むと、それ〔脳〕は予想していたより大きく、色は濃かった。それは彼女に大きな塩漬けにされた榎（くるみ）のように見えた。……眼球はめがねの役割を果たすプラスチックの透明なカプセルに包まれていて、彼女はその全体を見ることができた。脳とつながっている視神経は灰色のスパゲッティのようだった。³⁾

溶液の中で脳のまわりを神経につながれた目がぶかぶかと浮かぶ様子は、想像するとまさにグロテスクそのものである。グロテスクな描写はダールの短編にはいたるところに見受けられ枚挙にいとまがない。それがダールの怪奇、恐怖の中核をなす要素であり、彼の短編の大きな特徴になっていることは誰もが認めるところである。どうしてダールにはこのようなグロテスクな場面が多いのであろうか。一つには、読者の恐いもの見たさを満足させようとする大衆作家のコマーシャルリズムがあるであろう。しかし、それは自分で実際に目撃したものでなければリアルな恐怖は生まれえないものである。

さて、目が脳のまわりをぶかぶかと浮かんでいるイメージは、ある一つのイメージと重なり合う。第二次大戦が勃発した1939年、ダールは英国空軍に志願し、ナイロビで訓練を受けた後、戦闘機のパイロットとして地中海でドイツ軍機と血みどろの戦いをしていた。彼が常に恐れていたのは上空で太陽を背にしてこちらのすきをうかがっているドイツ人パイロットの〈目〉で

あった。『単独飛行』(Going Solo)の中で、「ユンカース 88 には 3 人の乗員がいる、つまり 6 個の目がある。だから、6 機のユンカースだから少なくとも 36 個の目が空をじっと見ていることになる」⁴⁾という描写があり、このイメージがぶかりぶかりと脳のまわりを浮かんでいる目のイメージと奇妙に重なる。戦闘機のパイロットは常に敵を最初に発見しなければならない。相手に先に発見されることは即自分の死につながる。だからたえずダールは太陽の陰に隠れているかも知れない敵の〈目〉の恐怖にさいなまれていたのである。一度彼は地上にいたときドイツ軍機から機銃掃射されたことがある。彼は飛び去る飛行機のコックピットにすわっているドイツ人の〈目〉を見た。「その二つの目は前を見ることに集中して輝いていた」と語っている。このような体験からダールは本能的に〈目〉を恐れる習慣が培われ、その結果無意識にしろそうでないにしろ、それが彼の作品に反映されるようになったのではないだろうか。ダールの作品に目の描写が多いのは、戦闘機の搭乗員として〈目〉の恐怖にさいなまれたからではないだろうか。

III

その目が彼女を見つめていることに疑いはなかった。彼は完全に意識を取り戻し、自分がどこにいるか何故そこにいるか知っていた。メアリーはこの興味ある状態をしばらく考えた。彼女は急に「先生、私は彼が急にかわそうになりました。水の中で独りぼっちでいるなんて。ウィリアム、これから私が面倒見て上げるからね。先生、いつ彼を家に連れて帰れますか」と聞いた。ランディーは驚いて、それは無理だと言った。しかし、彼女は自分の夫なのだからどうしても家に連れて帰ると言って聞かなかった。ランディーはそのとき彼女がバッグからタバコを出して火をつけるのを何気なく見た。彼らが部屋を出ようとテーブルのそばを通ったとき、彼女ははちをのぞき込んで、

「何も心配しなくていいのよ。できるだけ早く家に連れて帰ってあげるから。あなたの面倒はちゃんとしてあげるから。だからね、いいこと……」こう言って、彼女はタバコを唇にもって吸おうとした。

するとすぐその目がきらっと光った (Instantly the eye flashed).⁵⁾

ウィリアムはタバコが嫌いだった。ところが目だけになった彼はどうするこ

ともできない。怒りを口に出すことも、タバコを手で取り上げることもできない。それを全て承知でメアリーはわざと、まさしく彼の〈目〉の前でタバコを吸おうとしたのである。この *flashed* という一語にはそういうウィリアムの怒りが凝縮している。この箇所は恐いところであるが、何かしら笑いがある。ダールの短編の二つ目の特徴は、恐怖の中にもしばしば〈ユーモア〉が存在することである。戦闘機のパイロットになる前、ダールはアフリカのダー・エ・サラームで上官から命じられ現地人部隊を率いてドイツ民間人の逃亡を阻止し連行してきたエピソードがある。部下の軍曹に両手を上げたらドイツ人達の頭上に機関銃とライフルを撃つようにと命じたけれども、実際に「パンパン」と銃声が出て弾丸がうなりをあげて彼らの頭上を通過していったとき「ドイツ人達は飛び上がった。文字どおり飛び上がった。そして私も飛び上がった」のである。ドイツ人もダールも敵味方の区別なく一様に飛び上がる様は何とも滑稽である。事実は小説よりも奇なりではないが、生きるか死ぬかの戦いの中には時として予期せぬことが起こるものである。恐怖の中にも時として笑いがあることをダールは身をもって経験していたのである。

さて、〈目〉の描写をもう一步進んで考えてみたい。今までの例で分かるように、描写される目は必ず〈光〉を放っていた。たとえば、上の引用では「きらっと光った」というのに *flashed* という語を使っていた。前後するがランディーがウィリアムに手術を勧めるときの「興奮のきらめき」は *sparks* という語を使い、ウィリアムがタバコを吸っているメアリーを見つけたときの「怒りの小さな黒い点が燃えていた」という表現には *blazing* を使っている。この3つの語が喚起するのは何かが一瞬と光を放って爆発し、燃え上がり、火花を散らすイメージである。ダールは英国空軍に入って訓練を受けた後、任地に赴く際に上官の不適切な指示で燃料切れになり砂漠に不時着したことがある。100キロ近い速度で彼の飛行機は岩に激突し、彼の顔は反射鏡にぶつかって骨は砕け、彼はしばらく気絶していた。束の間意識を取り戻すと、左翼の燃料タンクがヒューという音をたてて爆発し、続いて右翼のタンクも爆発してシート・ベルトに縛り付けられた彼の体はまたたく間に炎に包まれた。ようやくの思いで操縦席から脱出した彼は砂の上に横たわり弾薬が火花をあげて飛び散るのを見た。奇跡的に助かった彼は病院に収容され手術を受けたが顔がひどくつぶれていたので数日意識が戻らず、意識が戻っても何週間か目が見えなかった。ダールの短編に目の描写が多いことは、

その描写にみられる〈光〉からも、彼の戦争体験にその原因を求めることができる。

IV

メアリーはウィリアムの目が怒りで光るのを見た。

最初彼女は動かなかった。彼女ははちをのぞき込みながら、タバコを口に持っていった。

それからわざとゆっくりとタバコを口にはさみ深く吸い込んだ。煙を肺の中に3秒か4秒ためておいて、それから急にヒューと鼻からいきおいよく煙を出した。煙は溶液に当たり、厚い青い雲となって溶液の表面でうねり、その目を覆った。⁶⁾

「すねないで、ウィリアム。すねたって何にもならないのよ」と彼女は静かに言った。ランディーは振り向いて彼女が何をしているか見ようとした。「もうそんなことはしないの。今日からあなたはメアリーの言うとおりにするのよ。分かった」と彼女はささやいた。「さあ、わがままは言わないで」と彼女はタバコを再び取り出しながら「言うことを聞かない子はひどいめにあうのよ、分かった」。読者はこの短編の最後で初めてメアリーの意図を理解する。彼女は復讐するためにウィリアムを家に連れ戻すのである。読者はそれまでメアリーは夫が独りでかわいそうだから家に連れて帰りたいのだと思っている。ところがメアリーが短編の最後でウィリアムの〈目〉の前でタバコを口にくわえたところから疑問に思い、ウィリアムの目がきらりと光った時点からメアリーの意図を理解する。この目の光によって読者は自らの予想が違った方向に進展するのを感じる。これはダールの〈ひねり (twist)〉である。ダールの短編の三つ目の特徴は、〈ひねり〉があるのでその結末が最後まで予想がつかないことにある。デイリー・テレグラフ紙が「ダールはあまりに巧みなストーリー・テラーなので予測がつきにくい。最後に勝利をおさめるのが暴君なのか、はたまた虐げられた臣民なのか分からない」と評している。この〈ひねり〉を用いた予測のつきにくさが彼の短編の最大の魅力であろう。

以上、ダールの短編における三つの特徴、グロテスク、ユーモア、そして

ひねりを見てきたわけだが、目の描写のイメージから実はグロテスク、ユーモアが彼の戦争体験を基盤にしていることが分かった。〈ひねり〉においてはどうか。ダールは確かに面白い。読んでいてくせになりそうである。しかし、ひねりを用いて話を面白くするあまりモラルというか、人生観みたいなものがない。他の作家に見られるような人間や人生の鋭い切り口が見あたらない。新しい表現形式を模索しているわけでもない。文学性に欠けると言い換えてもいい。しかし、私はこれはダールの作家としての能力の限界を示しているとは思わない。フレデリック・ラファエルは、

上官の不適切な言葉、戦争のおろかさ、死のきままさを語るとすれば控え目に語らねばならなかった。ダール以外の一体誰が、戦闘機のパイロットが空中戦の技術を教えられずにしばしば空に飛び立たせられたことを指摘しただろうか。……豊かに暮らし、本を書いてお金を儲けるのがダールにとっては最善の復讐であった。⁷⁾

戦争で残虐かつ残酷な事実を見続けた人間は、人生を一定の方向から見なくなる。生半可なモラルは過酷な事実に一瞬のうちにくつがえされてしまう。ダールは戦後、意識的に自分の人生観を語るのを避け、人を楽しませる短編や童話を書いてきたのではないだろうか。戦争が終わって彼がすぐ書いた短編集『汝の頭上に (Over to You)』には控え目な言葉だけれども、戦争の悲惨さを訴える彼の気持ちが窺える。しかし、その後の彼はプロットに最大の重きをおいて読者を楽しませる作品だけを書いてきた。その彼が晩年を向かえた1986年、戦後40年あまりたって再びあの当時を振り返る『単独飛行』を書いた。控え目な表現だけに、彼が何も分からない若者であったがゆえに、彼の淡淡とした語りには共感を呼ぶ。気丈夫で優しい母親のもとにダールが三年ぶりに帰る最後のくだり「私はまだバスが100メートル離れているところから母を認めた。彼女は辛抱強く小屋の外でバスがやって来るのを待っていたのだった。私が知る限り、始発のバスが行ってから彼女は一時間か二時間そこに立っていたのだった」は感情を押し殺して言葉少なに語っているだけに読者の胸を打つ。ダールはこの作品において初めて当時の自分を冷静に見つめることができたのである。だからそれまでの短編にない文学の香りがしてならない。

注

- 1) Malcolm Bradbury, 'Always a Dog Beneath the Skin', *The New York Times Book Review*, February 7, 1960, p. 5.
- 2) *The Collected Short Stories of Roald Dahl*, Penguin Books, 1992, p. 13.
- 3) *Ibid.*, p. 31–32.
- 4) *Going Solo*, Penguin Books, 1987, p. 136.
- 5) *The Collected Short Stories of Roald Dahl*, p. 35.
- 6) *Ibid.*, p. 35.
- 7) Frederic Raphael, 'Stories from the Source of Heartlessness', *TLS*, October 4, 1991, p. 28.

